

太陽金網株式会社

特許と意匠の掛け合わせや出願の順番なども考慮して戦略化

「顧客第一主義をモットーに、時代と産業のニーズを常に先取りした製品の提供」を企業理念に掲げ、さまざまな業界に対して、金網技術を中心に貢献を続けている。自動車などの製造ラインには欠かせないコンベアベルトや、他社に先駆けた電磁波シールドなどを幅広く開発して提供。メーカー兼専門商社としてグローバル市場でも活躍している。

主な権利

2015年：商標登録 第5732856号
2015年：意匠登録 第1520247号
2015年：特許 第5824783号
2016年：特許 第5976600号
2017年：特許 第6245654号

会社概要

所在地：東京都品川区大崎 3-6-9 (東京営業所)
電話：03-3493-7851
URL：http://www.twc-net.co.jp
業種：金網加工品、EMI 対策製品、機能性素材などの製造・販売
設立：1945年(昭和20年)
資本金：9,000万円



開発部 設計技術室 課長：遠藤 史健さん

小惑星探査機「はやぶさ」にも使われるなど幅広く貢献

貢献している産業界は、驚くほど幅広い。自動車、食品、化学、医療、建築、宇宙産業…。業界を問わず、あらゆる金網製品やベルト製品、シールド製品などを、日本のみならず世界へと送り出している。

ちょうど終戦の年、1945年に創業した太陽金網株式会社。金網と言っても、すぐに思い起こされるようなフェンスの金網ではない。工業用金網卸からスタートし、塗料や粉末をふるいにかけて、ろ過したりする特殊なフィルター技術が評価された。半導体の業界などでも注目され、提供する製品の幅も拡大。熱処理用のコンベアベルトも開発され、製造ラインを支えるようになった。さらには、金属の線を織り込む技術を活かし、電磁波を遮蔽するシールドなども開発。こうしたシールドや放熱部材などは宇宙産業にも飛び出し、あの小惑星探査機「はやぶさ」にも使用されたのだ。

知財マインドを醸成すれば会社の大きな力になる

そんな同社も、以前は知財管理体制が構築されていたわけではなく、過去には知財トラブルに的確に対応できなかった経験もあるという。初めて知財センターを訪れたのは、ホームページを見て無料で相談できると知った2010年のこと。自社製品の名前が他社の商標登録に触れないようにするには、どうしたらよいかの相談だった。

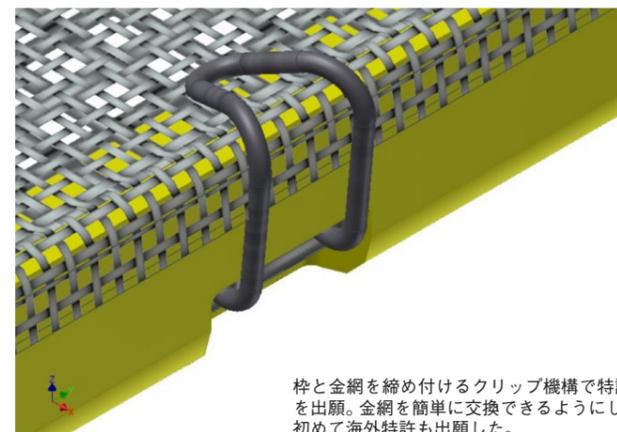
2011年からは、知財センターのニッチトップ育成支援を受ける。これについて開発部の遠藤氏は、「特許検索や戦略策定などの社内セミナーを通して、必要な知財知識が得られました。社内に知財の規定を作ることができ、知財の権利を取るメリットも全社的に理解できるようになりました。元々、なんとなく知ってはいたけれど、手続きなど面倒に感じていた部分もあったと思います。知財マインドが醸成されたことは、会社の大きな力になりましたね」と語る。

価値ある大切なアイデアを権利化する重要性は大きい

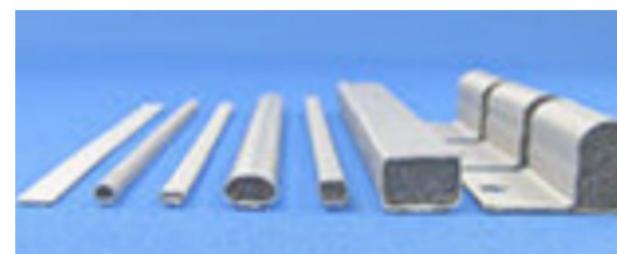
同社では経営陣を含む「知財委員会」を発足させ、社内意思決定のしくみを構築。設計や営業の現場レベルでも知財の権利化を検討する意識が高まり、ニッチトップ育成支援期間内の特許出願は5件にもなった。これに当たっては担当者から経営陣に、出願理由を明確に説明できるようになったともいう。

例えば、今までは枠と金網を締め付けるのに、線をこよって固定していたのを、簡単にクリップで留める機構にして特許を出願。金網をより簡単に交換できるようにした。「この組み立て方式は、知財センターの支援を受けながら、初めて海外特許も出願できました。真似しやすいものについて、しっかりと権利を主張してガードする戦略です」と遠藤氏は語る。

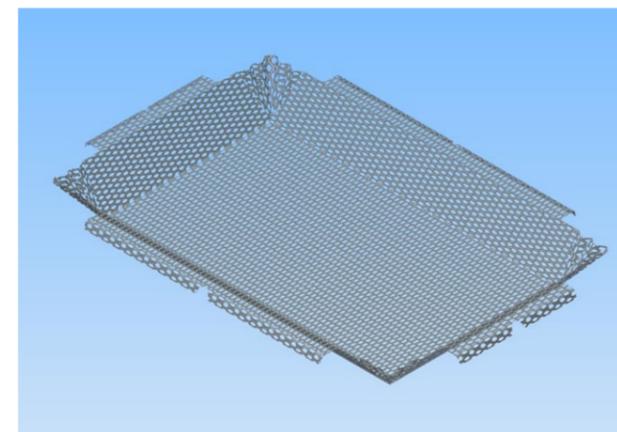
ファブレスのメーカーであり専門商社でもある同社は、アイデアが大きな武器になる。だからこそ、そのアイデアを権利化することの重要性は大きい。「昔は、



枠と金網を締め付けるクリップ機構で特許を出願。金網を簡単に交換できるようにし、初めて海外特許も出願した。



さまざまな EMI シールド製品も、同社の主力製品。EMI とは Electro Magnetic Interference の略で、電磁波障害のことである。



ひし形の穴の開いたエキスパンドメタルのトレー。曲げに弱かったトレーを改良し、角の波型構造で強度を高め、意匠と特許の両方を取得した。



熱処理用のコンベアに高温で使われるメッシュベルトは、さまざまな産業を支えている。

アイデアを渡して終わりというケースが多かったのです。でも最近は、営業から開発に対して、『これは知財になりますかね?』と聞かれることも徐々に増えてきました」

知財について何に取り組みどこに着眼するべきか分かる

「知財センターのニッチトップ育成支援の内容は、とても分かりやすかったと思います。会社が『知財に取り組みたい』と考えていても、実際に何をすべきで、どこに着眼すればいいかは、専門家のアドバイスを受けなければ、なかなか分かりません。知的財産には、特許・実用新案、意匠、商標、著作権、ノウハウという『5人の侍』がいるから、そんな侍たちを大切に掛け合わせで知財を守ろうという話など、根本から楽しく学ぶことができました」と遠藤氏。実際に、特許と意匠という掛け合わせで出願しているケースもあるという。「その場合に、先に意匠を出すか、特許を出すかという順

番を考える戦略も大切です。意匠については、自分で書類を作成できるようにもなりました」

ひし形の穴の開いたエキスパンドメタルをプレスで曲げたトレーでは、意匠と特許の両方を取得した。今までは曲げの力に弱かったトレーを改良し、角の部分に波を寄らせるという工夫で強度を高めている。革製品の加工に見られるような従来の技術ではなく、工業用の金網で成型したのは画期的であり、同社が誇る大きな知財となった。

会話を楽しみながらお互いに情報を交換する知財交流会

ニッチトップ育成支援が終了してから、知財センターを継続的に活用。日常

業務の中に知財活動が当たり前にも組み込まれるようになった。

知財交流会への参加も、得るものが多いと遠藤氏は語る。「同じような中小企業で、似たような悩みをみなさんが持っていると感じます。それでもいろんな業界の人がいますから、会話が面白いんですよ。モノの調べ方のコツを教えてもらったり、メインの仕事とサブの仕事のバランスの取り方を意見交換したり。とても刺激になります」

今後は自社設計をする上で、特許性の確認などを行いながら設計を進めたいという。アイデアあるところに、知財がある。そしてひと回りパワーアップした同社は「2020年ビジョン」という戦略・活動指針を掲げながら、2020年に節目の創立75周年を迎える。

知財センターから

知財センターの助成金を利用して海外特許も出願

本格的に知財管理に取り組むことにより、意識改革を行った会社です。ニッチトップ育成支援を始めてから、さまざまな出願を行うようになり、知財センターの助成金を利用して海外特許も出願しました。特許、意匠、商標の使い分けや掛け合わせ、出願するタイミングなども考えて工夫できるようになりました。担当：秋葉原 阿部(隆)アドバイザー